１０	稲沢	稲沢市立稲沢西小学校 稲沢市立稲沢北小学校 稲沢市立丸甲小学校	○林　三菜子（ハヤシ　ミナコ） 加藤　牧樹（カトウ　マキ） 長岡　栄江（ナガオカ　ヨシエ）

分科会番号	１４	分科会名	特別支援教育

研究題目

『生涯にわたり主体的に生きていこうとする児童・生徒の育成』

～　一人一人の興味・関心や強みを活かし、なりたい自分を目指す自立活動を通して　～

１　研究の経緯

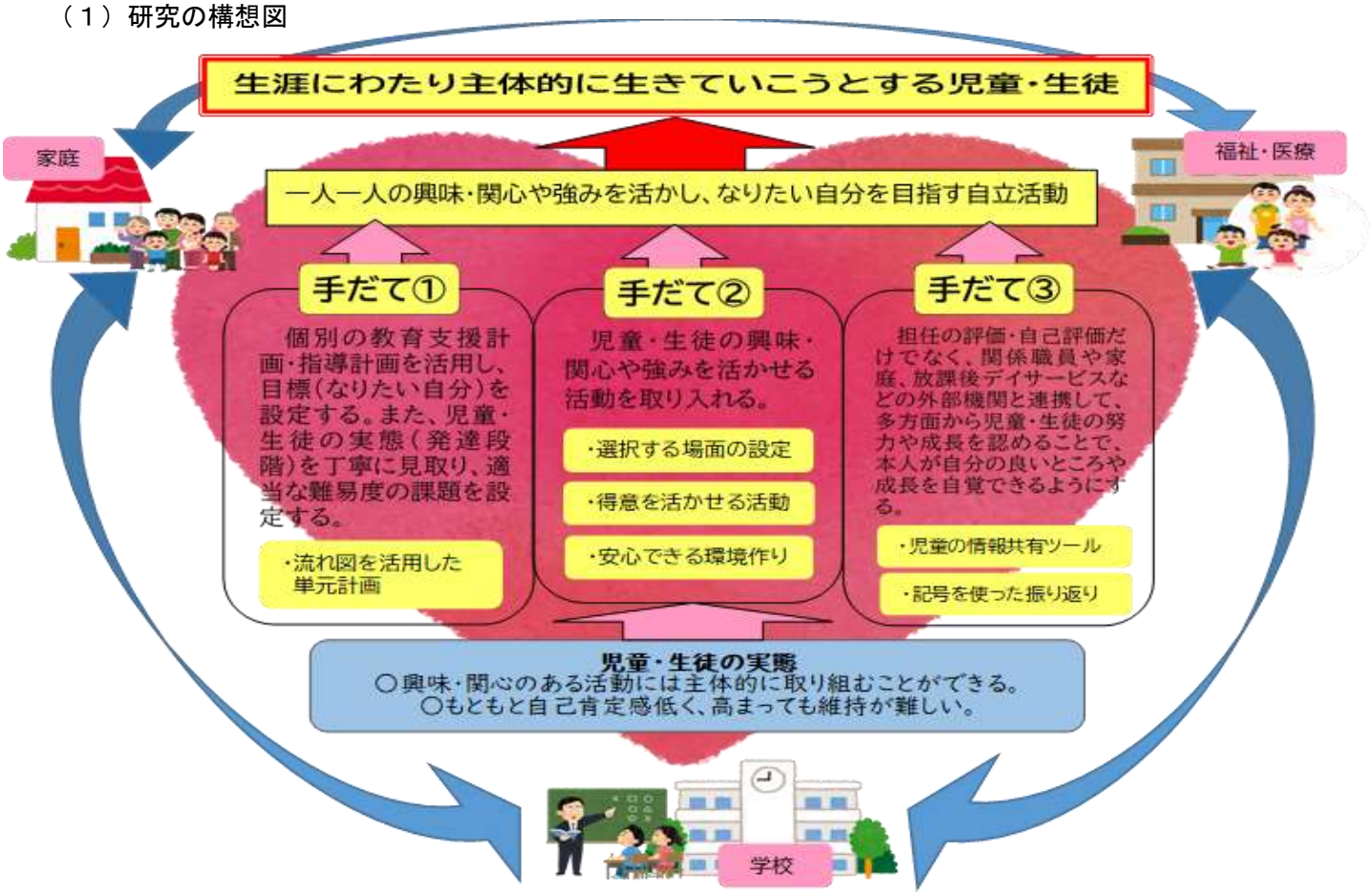
特別支援学校の学習指導要領（小学部・中学部）にある自立活動の目標には、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」とある。日頃の学習や生活の様子から「障害による学習上や生活上の困難」を把握し、困難な状態の改善を図る指導を各教科等の指導と並行して行うことが、人間として調和のとれた育成を目指すうえでは欠かせない。自立活動は、障害のある児童・生徒の教育において、教育課程を構成する大変重要な教育内容の一つである。

稲沢市教育研究会特別支援教育部会では、昨年度、『生涯にわたり主体的に生きていこうとする児童・生徒の育成』～児童・生徒一人一人の興味・関心や強みを活かした自立活動を通して～という研究テーマのもと実践を行い、個々の特性を知り、児童・生徒の興味・関心や得意なことを活かした自立活動を行うことで自己肯定感が高まり、主体性を高めることができるという成果を得た。しかし、一度高まった自己肯定感を維持することが難しく、活動内容によって、主体的に活動に参加できないこともあった。そのため、さらに研究テーマにせまるためには、高まった自己肯定感を維持するための工夫が必要であると考えた。

そこで今年度は、児童・生徒の思いに寄り添うことを大切にして、「なりたい自分」を明確にもたせ、それに向かって努力を続ける経験をさせ、自己肯定感を高め、その状態を維持することで、夢や目標をもち、生涯にわたり主体的に生きていけるような児童・生徒を育てたいという願いからこのテーマを設定し、研究を進めた。

２　研究のねらい

（１）研究の構想図



（２）仮説と手立て

仮説①
　児童・生徒や保護者の思いに寄り添った目標（なりたい自分）を設定し、実態に合ったか課題を設定することで、児童・生徒は自己肯定感を高めながら、課題に取り組むことができるだろう。

手だて①
　個別の教育支援計画・指導計画を活用し、目標（なりたい自分）を設定する。また、児童・生徒の実態（発達段階）を丁寧に見取り、適当な難易度の課題を設定する。
・流れ図の作成
・なりたい自分の設定

仮説②
　児童・生徒の特性を生かした活動を行うことで、児童・生徒は意欲が高まり、より主体的に活動することができるだろう。

手だて②
　児童・生徒の興味・関心や強みを活かせる活動を取り入れる。
・児童・生徒が好きな活動と困難を改善するための指導を組み合わせた活動

仮説③
　評価・振り返りを充実させることで、児童・生徒は自己肯定感を維持し、継続的に活動をしたり、主体性を保ちながら目標に向かって努力を続けたりすることができるだろう。

手だて③
　担任の評価・自己評価だけでなく、関係職員や家庭、放課後等デイサービスなどの外部機関と連携して、多方面から児童・生徒の努力や成長を認めることで、本人が自分の良いところや成長をより自覚できるようにする。
・記号を使った簡単な振り返り
・「今こんな様子ですファイル」
・児童の活動を知らせる通信の発行

３　研究の実際

　興味・関心を活かした活動の中で、なりたい自分について考える実践（A 小学校自閉症・情緒障害特別支援学級）

（１）　児童の現在の状況

所属	けやき１組（２年）	名前	児童 A
願い	【児童生徒本人の願い】 ・友達となかよく過ごしたい。		
	【保護者の願い】 ・集団行事に楽しく参加してほしい。 ・勝ち負けにこだわらず楽しく遊んでほしい。 ・何事も最後までがんばって取り組んでほしい。		
現在の状況	【得意なこと・できること・好きなこと】 ・交流及び共同学習に付き添い無しで参加することができる。（生活科・音楽科・体育科など） ・発音が不明瞭なことがあるが、自分の思いを言葉で表現することができる。 ・平仮名や片仮名は、読むことができる。 ・短い文章を一人で読むことができる。 ・１００までの数字をかいたり読んだりできる。 ・和が２桁になる１桁＋１桁の足し算や、差が１桁になる２桁－１桁の引き算を、指を使って計算できる。 ・慣れている人にはしっかりと挨拶をして、簡単な質問ができる。 ・教室移動が一人で行える。 ・アイロンビースや工作、カード遊びや鬼遊びが好き。		

	【苦手なこと・できないこと・嫌いなこと】 ・食事は自分ででき、箸も使うことができるが、野菜は苦手で偏食である。 ・自分の意にそぐわないことや面倒なことがあると、駄々をこねて指示に従うことができないことがある。 ・遊びでの勝敗にこだわり、負けるとすねたりその場から逃げたりする。

自立活動の目標	短期目標【１学期】	該当項目
	・自分の苦手なことや勝ち負けのあるゲームを行う際、自分の意にそぐわないことがあっても参加し続けることができる。	②－（１） ③－（４）

（２）１学期の自立活動（児童Ａ）の計画

【１学期自立活動計画表】		関係者との連携		
自立活動の時間	教科指導 モジュールの時間 休み時間	交流授業 関係職員	家庭	放課後等 デイサービス
【歓迎会をしよう】３時間 ・どんなことをするか話し合おう（１／３） ・準備をしよう（２／３） ・みんなで楽しもう（３／３） 【夏野菜を育てよう】１０時間 ・どんな野菜を育てたいか決めよう（１／１０） ・草取りをしよう（２／１０） ・土作りをしよう（３／１０） ・苗を植えよう（４／１０） ・支柱を立てよう（５／１０） ・草取りをしよう（６／１０） ・収穫をしよう（７・８／１０） ・みんなで食べよう（９・１０／１０） 【七夕会をしよう】７時間 ・七夕のことを知ろう（１／７） ・七夕会の計画を立てよう（２／７） ・係に分かれて準備をしよう（３・４／７） ・短冊や飾りを作ろう（５・６／７） ・七夕会をしよう（７／７） 【アイロンビーズを楽しもう】 【シールアートを楽しもう】	【ＳＳＴ】 ・落ちた落ちた ・チェックトーク ・ロパクトーク ・よく聞いて答えよう ・なんでもバスケット 最後までしっかり聞けたか、楽しく参加できたかなどがんばるポイントをカードを見せながら話してから始める。最後に自己評価させる。 【野菜の世話】 毎朝の水やり 【カード遊びを楽しもう】 【鬼ごっこ・かくれんぼをしよう】 楽しく最後まで遊べた日は、カレンダーに花丸をつける。花丸が５個たまったらシールを連絡帳に貼る。	・よかったことや課題などを連絡ノートで回覧し共有する。（週１回） ・支援方法について共通認識でできるようにする。 ・職員室へ朝の挨拶へ行き、先生達の顔と名前を覚え、コミュニケーションが取れるようにする。	・保護者との相談（春休み） ・保護者用の連絡帳で、毎時間の授業様子を知らせる。(毎日) また、授業以外の良かったことや課題も伝える。（週２，３回） ・よかったことは写真や動画で記録し、保護者に共有する。（週１回） ・学級通信を発行し、学級全体の様子が伝わるようにする。（週１回） ・医療機関での指導を保護者から伝えてもらい指導に生かす。	・下校時の引継のときに様子を話す。 ・Ａさん通信を学期に１回発行し、現在の頑張っている様子や課題を知ってもらう。

（３）実践内容

【手立て①】

ア　流れ図から見取った児童の実態からの課題設定

児童Ａは、アイロンビーズや工作などが好きである。また、他者のために役立ちたいという気持ちがあり、当番活動や会の準備などを進んで行う。取組を褒められるとさらに熱心に活動することができ

る。ルールさえ理解できれば、カード遊びや鬼遊びなどに一定時間参加することもできる。一方、自分の意にそぐわないことや嫌なことは避けることや、相手の立場や気持ちを意識することが難しくコミュニケーションをとることに課題がある。そこで、興味・関心や強みを生かし、なりたい自分を目指すことを意識した１学期の自立活動の単元を構成した。

イ　目標（なりたい自分）の設定

単元の始めに担任が絵本の読み聞かせをして七夕について触れた。児童Ａは七夕についてほとんど知らなかったようで、「(織り姫と彦星は）なんで仕事しないの」「なんで七夕の日は会っていいの」など、「なんで攻撃」がやまなかった。担任が「なんで」に一つ一つ答えることで七夕の意味を理解した。また、七夕会に向けての予定を知らせ活動の見通しをもたせた。短冊は一人３枚書くことにし、①なりたい自分について②家族での願い事③自由と書く観点を担任から示した。児童Ａは、①やさしい人になりたい②長島スパーランド（テーマパーク）に行きたい③（特別支援学級の上級生と）仲間になりたいと書いた。

児童Ａに、なぜやさしい人になりたいか尋ねると「〇〇君みたいになりたいから」と１年生の時にお世話になった卒業生の名前を出した。漠然となりたい人のイメージがあることが分かった。また、今現在の自分についてできていること、できていないことを考えたり、他の友達はどんなことを考えているのかを知ったりすれば、なりたい自分について広げたり深めたりできるのではないかと考えた。そこで、交流学級で「２年生の間になりたい自分について考えよう」という学級活動の授業を行った（写真１）。児童一人一人があこがれの人についてどんなところがすごいと思うのかを考えたり、自分はこんなことができる、反対にこんなことができていないということを考えたりして友達と伝え合い、最終的に２年生の間になりたい自分について短冊に願い事として書いた。児童Ａは友達と交流する中で、１年生が困っていたらやさしくしたいという思いが加わり「小さい子にやさしくできる人になりたい」と新たに短冊に書いた。授業後、友達が書いた短冊を集め、特別支援学級に戻ってから児童Ａが笹に付けていった。その時友達の願い事を見ながら「〇〇ちゃんはこんなふうになりたいんだね」とつぶやく姿が見られた。さらに、職員室で「先生は短冊に何を書きますか？」と他の職員へ質問し、「約束を守る人になりたいです」「健康に過ごしたいです」などと話を聞くことで、大人にも「なりたい自分」があることを知ることができた。

（写真１）交流学級での授業の様子

【手だて②】

ア【選択の場の設定】七夕会をしよう

七夕会で実際にどんなことをしたいか話し合う際には、字を書くことが得意な児童Ａにホワイトボードに学級の仲間の意見を書いていく仕事を任せた。児童Ａは、昨年の経験から、楽しかったことややってみたいことを挙げ、話し合いの結果、笹飾りを作ることや七夕の歌を歌うこと、皆で楽しめるゲームをすることに決まった。次に、係を決める場面では、「飾り係」「司会係」「ゲーム係」「歌係」から、それぞれ自分にできそうな仕事を選ばせ、児童Ａは「飾り係」を選択した。

係に分かれて準備をする活動では、児童Ａの得意な「アイロンビーズ」で飾りを作る事を担任から勧めたが、「笹飾りについてタブレットＰＣで調べたい」と言い、自分で検索をした。タイピング練習やそれに伴うアルファベットの学習は１年生のころから積み重ねており、調べたいことがあるときにタブレットＰＣを活用することできる。結局アイロンビーズではなく、折り紙を使った飾り折りやポケモンの折り方の動画を見つけて、再生と一時停止を繰り返しながら自分の力で作り上げた（写真２）。同じ学級の１年生の子に折り方を教えてあげようとしたが、「分からない」と言われ、うまく説明できず困ってしまう場面もあった。

（写真２）動画を見ながら飾りを折るＡ児

イ　好きな遊びを活かしたソーシャルスキルトレーニング（ＳＳＴ）

児童Ａは、カード遊びや鬼遊びなどが好きで、ルールを理解して学級の仲間や交流学級の仲間と一緒に遊ぶことができる。しかし、負けを受け入れられず怒り出したり、鬼になりたくなくてその場から抜けてしまったりすることはこれまで多々あった。そのようなときに上級生や交流学級の友達が優しく接しても、受け答えに戸惑い適切なコミュニケーションがとれない。逆に相手の話を聞いていなくて状

況が分からず天邪鬼な態度をとったり、場にそぐわない言葉を発したりし相手を不愉快にさせてしまうことがあった。

児童Ａが好きな遊びをより仲間と楽しめるように、本単元に入る前から、「適切なコミュニケーションの能力を身に付け、ルールを守って遊びに参加できること」をめあてに、朝の会やモジュールの時間、休み時間などに計画的にＳＳＴやカード遊びを取り入れてきた。１学期は、学習や人間関係の基本となる「聞くこと」を意識づける活動から始めた。例えば毎朝の健康観察時にチェックトークを行った。チェックトークは、担任が一人ずつ名前を呼ぶ際、返事とともに担任から知らされたお題（例えば、好きな遊び、色、食べ物など）についてすぐ答え、全員が終わったら、「〇〇が好きな人は誰でしょう」と児童の発言からクイズを出すというものである。この活動では、「聞いていたこと」を褒めることで、聞いていたら活躍できた、認められたという体験をさせることができた。カード遊びでは、短い時間でも勝敗が早くつくように通常の半分の枚数にしたり、ルールを改定したりして遊べる回数が増えるようにした。負けたときに怒ったり泣いたりすることはまだあるが、みんなで「トライアゲイン！」と唱えてすぐにもう一度ゲームを行うことで気分を切り換え、もう一回できるという経験を積み重ねた。

【手だて③】

ア　振り返りカードによる毎時間の自己評価

本単元では振り返りカード（写真３）を活用し、その時間に予想される４つの大まかな段階の具体的な姿の表記とそのそれぞれを◎〇△×で示し、児童Ａが毎時間振り返りを行った。始めはあまり考えず◎をつけていた。より具体的なよい姿を意識できるように、２時間目からは授業の始めに振り返る項目を確認するようにした。

（写真３）記号を使った振り返りカード

イ　担任や関係職員の評価

年度初めの職員会議で、「自立活動と交流学習の年間計画とそれぞれの意義」について資料とともに説明した。また、児童Ａに関わる職員（交流学級担任、音楽科と図画工作科の教科担任、体育へ参加する際の付き添い担当、特別支援教育支援員、四役）へは、３学期末に行った保護者との面談での内容や、児童の得意不得意、児童との関わり方などについて伝えた。さらに、毎日を過ごす中で出てくる課題や成長を共有することが大切だと考え、週に１回、担任がそれぞれの先生から聞き取ったことやメモをもらったことなども加えて児童Ａの様子をまとめ、「今こんな様子ですファイル（写真４）」に記録し、関係職員に回覧した。このファイルを用いることで、日頃なかなか情報共有の時間が確保できず、関係職員が全員顔を合わせる機会はもてないが、児童Ａががんばっていることや取り組んでいること、課題、保護者からの話などの共通理解を図り、声を掛けてもらうように働きかけることができた。児童Ａへの情報共有と接し方の確認をすることができ、関係職員からも児童の状態がわかり関わりがしやすいとの声をもらえた。また、夏休みには校内の職員に向けて「発達障害について」「合理的配慮とは」「発達障害児への学習支援ツールの紹介」などの簡単な学習会と、「『樫の木福祉会』施設見学会」に参加した際に学んだ内容の伝達講習を短時間で２回に分けて行った。

（写真４）今こんな様子ですファイル

ウ　家庭や放課後等デイサービスなどの外部機関の評価

学級通信を週に１回程度発行し、学級での出来事や学習の様子に加え、自立活動についても掲載した。自立活動で行った事の意味や身に付けさせたい力、現在の様子などを写真とともに知らせることで、それぞれの家庭でも話題にしてもらったり、取り組んでもらったりすることができた。また、学級の様子が伝わりやすく、学校公開日などで話題となるものができ、保護者同士の関わりを生むこともできた。個人の様子については、毎日の連絡帳で写真や文章で知らせ、言葉を掛けてもらうようにした。

児童Ａは複数の放課後等デイサービスも利用しているので、保護者に了解をとり「Ａ通信」を作成し主に１学期の自立活動の様子を知らせ、職員の方からも声を掛けてもらえるように働きかけた。

（４）結果と考察

ア 手だて①について

児童Ａの実態を把握するための情報収集や情報整理を行い、中心となる課題に対して優先する指導目標を決め、指導目標を達成するために必要な自立活動の項目を選定し、関連付けて具体的な指導内容を設定していく流れ図は、自立活動の計画を立てる上で必要不可欠であることを改めて実感した。児童や保護者の願いを大切にしながら、学習や生活上の困難を把握し、その改善を図る指導を行うことで、少しずつできることを増やしながら、楽しく活動する児童の姿がみられた。児童に対するアセスメントに不安があると指導にも確信がもてず不安になるので、実態の把握や自立活動の計画の段階から複数人で行えるとよいと感じた。「なりたい自分」という、児童にもわかりやすいキーワードを用いたことで、低学年の児童Ａでも自分の言葉で自分の思いとして目標をもつことができた（写真５）。児童Ａは「小さい子にやさしくできる人になりたい」という具体的な目標をもつことで、自分で作ることができた笹飾りの作り方を同じ学級の１年生に教えようとする姿が見られた。うまく説明することは難しかったが、大きな一歩であると感じた。また、関係職員と情報を共有することで、日頃関わっているいろいろな人たちの思いを知る機会をもったことで「なりたい自分」のイメージが広がり深まった。

（写真５）なりたい自分の短冊を笹に付けるＡ児

イ 手だて②について

単元を通して、会の内容を決めることや笹飾り作り、当日の遊びなど、楽しんで活動することができた（写真６）。途中で投げ出さず継続して活動できたのは、児童Ａの興味・関心のある物作りや会の準備を中心とした活動であったことが大きいと考える。また、計画的・継続的に行ってきたＳＳＴにより、遊びの中で聞くことを意識したり、仲良く遊ぶとはどういうことかを考えたりできるようになってきたことも関係していると考える。課題を乗り越えるための合い言葉「トライアゲイン！」を作り、学級全体でも唱えることで、お互いの理解にも繋がり、遊びで負けたときや気にいらないときの心持ちを変換するキーワードにもなった。

（写真６）学級の仲間と楽しく遊ぶＡ児

ウ 手だて③について

自己評価に振り返りカードを活用したことで、活動のめあてを意識して取り組めるようになった。また、授業の始めに具体的な良い姿を示すことでより目標達成がしやすくなった。児童Ａは、笹飾りの作り方を教える場面で「分からない」と友達に言われたことで、上手に教えられなかったと判断し、その日の振り返りは×をつけた。「そんなことないよ」という担任の言葉で△に変えたが、これまでの振り返りでは、安易に◎をつけがちだったので「うまくできなかった」「もっとうまく教えたい」という思いをもてたことに成長を感じた。

校内の関係職員や、家庭、放課後等デイサービスの職員の方に児童Ａの目標や取り組みを伝え、できたことを褒めてもらったり、励ましてもらったりすることで、児童Ａは、思い通りにいかないことがあっても途中で投げ出すことなく、前向きに活動に取り組むことができた。できるようになったことに対し、多方面から認めてもらったり、頑張っていることをたくさんの人が応援してくれていると実感したりすることは、児童が自己肯定感を保つのに有効であると感じた。

４ 成果と課題

以上のような実践を通して以下のような成果（○）と課題（●）が得られた。

○ 自立活動の流れ図を作成し、学習や生活上の困難を把握し、実態に合った課題を設定したり、児童や保護者の思いに寄り添い、目標（なりたい自分）を設定したりすることで、少しずつできることを増やしながら、楽しく活動する児童の姿がみられた。

○ 本人の得意なことや、興味のあることを中心とした活動と継続的にＳＳＴを合わせて行うことで、途中で投げ出すことなく、主体的に継続して活動することができた。

○ 成長や努力を多方面から認めてもらったり、励ましてもらったりすることで、自己肯定感を保つことができた。

● 自立活動をより充実させるためには、実態把握・計画の段階から複数人で行い、より多くの目で見て、より多くの引き出しで試行的な指導をしながら的確な把握と計画を行うべきである。